

裂けた背景

山村正夫

講談社文庫

裂けた背景

山村正夫

昭和53年5月15日第1刷発行

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽2-12-21

電話 東京 (03)945-1111(大代表)

振替 東京 8-3930

デザイン 亀倉雄策

製 版 豊国オフセット株式会社

印 刷 豊国オフセット株式会社

製 本 株式会社千曲堂

© Masao Yamamura 1978

Printed in Japan

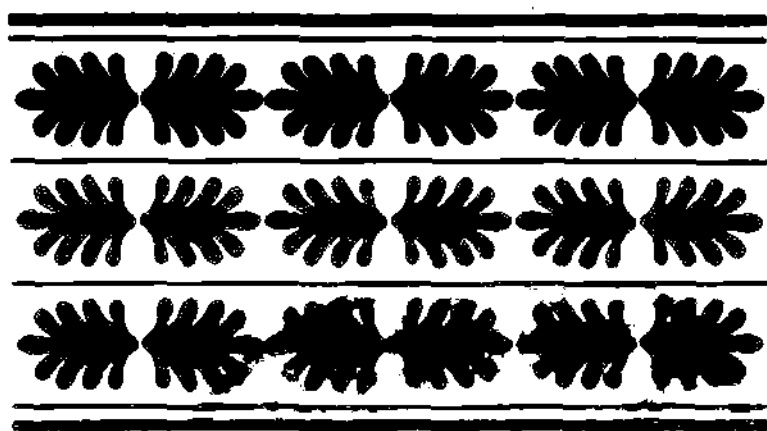
定価はカバーに表示してあります。

(落丁本・乱丁本はおとりかえします)

社文庫

裂けた背景

山村正夫



講談社

目次

プロローグ	一月二十一日（日曜日）	七
第一章	一月二十三日（火曜日）	二
第二章	一月二十四日（水曜日）	四
第三章	一月二十五日（木曜日）	七一
第四章	同月同日（木曜日）	一〇七
第五章	一月二十六日（金曜日）	一三四
第六章	一月二十九日（月曜日）	一六九
第七章	一月三十一日（水曜日）	二九
第八章	二月三日（土曜日）	二四一
第九章	二月四日（日曜日）	二五四
第十章	二月六日（火曜日）	二七九
第十一章	二月八日（木曜日）	三三九
第十二章	二月十一日（日曜日）	三五二
エピローグ	二月十三日（火曜日）	三六三

解説

森村誠一 三六五

裂けた背景

プロローグ

一月二十一日（日曜日）

1

帳場にある古風な柱時計の針が、午後十一時四十分を指そうとしていた。

台所の水仕事が一段落したので、こたつに入ってあたたまっているうちに、新米女中の田村キヨミは眠気におそわれてきた。昼間の疲れが出てきたのだ。ついウトウトとしかけたとき、鈴のついた入口の格子戸が乱暴にひらく音がした。

キヨミは思わず目をこすって、こたつから腰をうかした。帳場のカウンター越しにのぞくと、三十歳ぐらいの若い男の客が、襟に毛皮のついたレジャーコートの肩をすばめるようにして、人造石を敷きつめた入口に立っていた。

吹きこむ寒風が背中ではびいている。男は後ろ手で格子戸を閉めると、

「ご免ください」

と、奥を見まわすようにしながら、丁寧な口調で言った。

皮の手袋をはめた右手に、レザーバッグを重そうにさげていた。首すじまで無造作にのびた長髪と、馬鹿でかいワイン・カラーのサングラスが、自由業者である男の職業を特徴づけてい

た。彫りが深く、外人のような鼻梁びりょうの高い、個性的な容貌ようぼうの持ち主である。

「まあ、泉先生……」

たちまち目をかがやかせたキヨミは、はずんだ声で言いながら、さっそく帳場から出迎えた。「いらっしやいませ。ずいぶんしばらくでしたわね。テレビではしじゅう拝見してますけど、何カ月ぶりですかしら」

「もうそんなになるかね」

「なりますとも。それに、日曜日にいらっしやるなんて、お珍しいですわ」

「うん、まあな……」

靴をぬいだ泉は、スリッパをつっかけながらあいまいに答えると、

「いつもの部屋は、あいてるかい？」

と、せっかちに尋ねた。

「それがあいにくと今夜は、夕月の間がふさがってるんです。前もってお電話をくださってれば、お取りしておきましたのに……」

「そうか。そいつは残念だな……」

泉はがっかりして見せてから、急に眉をひそめた。

「なんだ。マージャンの客が来てるのかい？」

さも意外そうな口ぶりだった。

確かに二階からは、牌をかきまわすはでな音が聞こえてきている。

「ええ、今夜は三組も来て、徹マンをやるんですって。……でも、毎週のことですもの。先生も

よくご存じじゃありませんの」

「そう。そうだったっけな……」

泉はドギマギしたように視線をそらせた。

へあら、先生ったら、今夜はどうかしているわ

レザーバッグを受け取り、階段を先に立って案内しながら、キヨミは不思議に思った。

この旅荘『あけぼの』はいわゆる連れ込み専門のラブ・ホテルだが、アベック客相手だけでは経営が苦しかった。

なんといつても場所が悪いのだ。

同じ新宿駅周辺でも、角筈三丁目から西新宿三丁目と町名改称をしたこの甲州街道沿いの一画は、初台寄りのもつともはずれにあたっていた。盛り場からは離れすぎている。夏場はけっこうアベックの客も訪れたが、冬に入るときっぱりになった。屋根の上にお定まりの温泉マークのネオンをともしてはあるが、たてこんだ家並みに隠れて人目につきにくいせいかな、あまり効果はなかった。

したがって冬場の利用者は、特殊な客によって占められていた。

社用族が徹夜マージャンの会場に使うのである。経営者が赤坂の料亭のおかみなので、そちらの客が遊びに使うこともけっこう多かった。ことに土曜日と日曜日の夜は、ほとんどがそうしたマージャン客で占められるといつてよかった。

ただ、『あけぼの』にとって、一年越しのなじみ客である泉慎也の場合だけは、最初から利用の仕方が違っていた。

泉の本職は放送ライターである。大学を卒業するとすぐに、さる夕刊新聞社の社会部記者になったが、二年前、『アジア・テレビ』が放送芸能祭に募集した懸賞テレビ・ドラマに入選して一本立ちになった。その後、『関東テレビ』のゴールデンアワーの連続ドラマとして執筆した『夏子の湖』が大当たりして、すっかりその道の人気作家になっていた。

それに、近ごろでは、ミッドナイト・ショーの司会者やディスクジョッキーなどにも起用されて、テレビ・タレントの方でもすっかり有名になっている。

だが、それでも月のうちの何日かは、原稿の執筆に費やさなければならなかった。そのため『あけぼの』を仕事場がわりに、しばしば利用していたのだ。

経営者のおかみとも、前から昵懇^{じっこん}の仲だったから、何かと気心が知れているし、わがままや無理が言えるせいだった。事実、居心地は決して悪くはなかった。

二人いる女中は、いずれもさっぱりとした気だてのいい女で、泉のためには特別に家庭的なサービスをしてくれる。

泉は『あけぼの』がすっかり気に入っていた。

ただ、土曜日と日曜日の夜だけは、彼の方で避けていた。牌の騒音にじやまをされて仕事にならないのを、知っていたからである。

それだけになおさら……と、キヨミは不審を抱いたのだった。このところずっと御無沙汰つきだったので、マージャン客のことは忘れてしまったのかもしれない。

しかし彼女には、泉のようすがどことなく、いつもと違っているような気がしてならなかった。

あいにくと夕月の間がふさがっているので、二階のつきあたりにある入船の間に通してからもそうであった。

以前の泉慎也だったら、さっさと服を脱いでどてらに着替えるのだが、今夜にかぎってなぜかぐずぐずしていた。トレードマークといわれるサングラスをはずさないのは不思議がないとしても、両手にはめた皮の手袋までも取ろうとしないのは、どうしたわけなのか？

そればかりではない。キヨミと顔を合わせるのをいとうように、彼女に背をむけて、窓外の夜景をながめていた。

前方には巨大な二基のガスタンクが、グリーンの常夜燈に照らされて、背景の闇やみにときならぬ気球を揚げたごとく、ぼんやり浮かびあがっている。東京ガスの淀橋整圧所とよはしせいあつじょのタンクだった。

その情景も見慣れているはずなのに、彼はいかにももの珍しげだった。

いや、不審といえはまだあった。

まだ独身の泉は、プレイボーイとしてもうわさが高く、そのせいか、独特のソフト・ボイスで喋るユーモアまじりのムーディッシュな話術が巧みで、それが女性にはたまらない魅力のひとつになっていた。『あけぼの』へ来ても、軽いジョークで女中たちを笑わせて、飽きさせなかった。おかげでまだ若いキヨミなどは、大の泉ファンの一人なのだった。

それが今夜の彼は、まるで別人のようにふさぎこんで、仏頂面をしているのである。どう考えても、キヨミの知っている泉慎也とは、フィーリングが違っていた。

「先生、お風呂はどうなさいます？」

キヨミが聞くと、泉は立ったまま無愛想に首をふった。

「風邪気味だから、やめておこう」

「それじゃあ、マッサージでもお呼びしましょうか？」

「いいや、そいつも結構だよ。それより、ビールと何かつまみになるようなものをたのむ。そうだな。ついでに寿司でも取ってくれないか」

「お寿司を？　はあ、かしこまりました」

張りきっていたキヨミは、白けた気持ちになりながら、とりあえず室内にそなえつけの冷蔵庫から、ビールを取り出してせんをぬいた。コップになみなみとつぐと、

「おつまみは、いますぐお持ちしますから」

早々に一礼して、彼女は部屋から引き下がった。

2

帳場へ戻ると、いつのまにか女中頭のシゲが、こたつの前にすわっていた。

徹夜マージャンの客のなかには、料亭の方の常連でもある大会社の部長クラスの連中が一組いるので、その方の接待にかかりきりになっていたはずだが、そちらの用が一段落したので引きあげてきて、一服したところらしい。

シゲはタバコを吸いながら夕刊をひろげていた。何か興味のある事件でもあったらしく、社会面に食い入るように見入っている。

「わたしのいないあいだに、どなたかお客さまがいらしたの？」

キヨミの気配に気がついて、シゲは老眼鏡をはずすとふりむいた。

娘夫婦と離れてこの『あけぼの』に住みこみでいる彼女は、もう六十近い年配の女で、めったにしかやってこないおかみにかわって、帳場の方も預かっているのだ。

「泉先生よ。前ぶれもなしに、突然飛びこみでいらっしゃるんですもの。びっくりしちゃったわよ」

キヨミは帳場に接した小さな台所で、泉のおつまみにするピーナッツや品川巻きを受けざらに入れながら報告した。

「へえ、このところずいぶんお見かぎりだったのにねえ。どういう風の吹きまわしだろう」

「お寿司を取ってほしいんですって。でも……おかしいわね。泉先生はいままで、中華料理のような、こつてりとした油っこいものしか注文なさらなかったのに……」

「何を言ってるのさ」

シゲはたしなめた。

「先生だってたまには、あっさりしたものを召しあがりたくなるときだってあるだろうよ」

「それはそうかもしれないけど、どうも今夜の先生は、何から何まで別人のように思えてならないのよ。だって、いつもだったらご自分の車でいらして、門のところでクラクションをお鳴らしになるでしょう。すると、裏の専用駐車場へご案内することになっているじゃないの。それが今夜に限って……」

「馬鹿馬鹿しい。お顔を見てご本人だったら、間違いはないじゃないの」

「だって、テレビにもそっくりショーというのがあるくらいですもの。他人だって、容貌がうり二つに似ている人はいくらでもいるわ。それに、先生はあのとおりいつも、サングラスをはずし

たことがないでしょう。男のカツラだってさいきんは、レオン・カトーペなんて精巧なものできているというじゃない。多少は顔が違ってても、年ごろや背恰好が同じ人だったら、いくらでも化けられるんじゃないのかしら」

「よしてよ。へたなミステリー小説じゃあるまいし、くだらない想像はおやめよ。そんなことを考えている暇に、火の用心でもした方がずっとましだと思うけどね。わたしなんかには、この新聞に載っている事件の方が、よっぽどビクビクさせられるよ」

シゲはタバコを灰さらにもみ消すと、

「そんなに心配だったら、わたしがかわりにようすを見てきてあげようか」

「いいわよ。おねえさんはお疲れでしょうから、ゆっくりやすんでちょうだい。先生のお世話はやっぱり……」

「そうれごらんなさい。先生にあんまりイカレすぎてるから、かえって取越苦労をするんだよ。あんたの気のせいよ」

からかい半分に言われて、キヨミの疑念もぐらついてきた。

へきつと、しばらくいらっしやらなかったあいだに、何かがあったのかもしれないわ

キヨミは自分勝手に、そう思いこむことにした。

それから彼女は二度、帳場と入船の間を往復している。最初はおつまみを運んだときだった。見ると泉は、相変わらず着替えもしないでこたつに入り、がぜん憔悴とした面持ちで、二本目のビールを飲みはじめていた。何かを黙然として考えこんでいる風に見えた。

次に寿司屋の出前がとどけてきたニギリ鮓を運ぶと、彼はひざの上に置いたレザールのバッグの

口をあけて、なかみをしらべていた。そしてキヨミと顔が合うなり、うろたえたように、あわててチャックを閉めてしまったのだ。

そのさい、キヨミはちらとのぞいただけだったが、レザーバッグのなかには、何やら四角な罐のようなものが押しこんであつたようだった。好奇心を燃やした彼女は、

「なんですか？ それは……」

と、聞きかけてやめてしまった。

泉の目が真剣そのもので、にらむような怖い顔をして彼女を見たからである。

キヨミはおそれをなして、余計な会話はいっさい交わさず、ほうほうの体で帳場へ引き上げてしまった。

それから二時間ほどたつて、ほろ酔い気味の赤い顔をした泉が、二階から階段をおりてきた。レザーバッグを後生大事にかかえるようにしている。

「おや、まあ、先生……もうお帰りですか？」

今度はさすがにシゲの方が驚いて、帳場から飛び出した。

「なあに、ちよつと用足しをしてくるだけだ。じきにもどってくるから、入口の戸はあけといってくれないか」

泉は変に口ごもるような答え方をした。

シゲにつづいて送りに出たキヨミが、下駄箱から靴を出してそろえると、彼はそれをはきかけたが、ためらいがちに言った。

「すまないけどね。ちよつと五千円ばかり貸してくれないか。明日の朝、勘定のさいに清算す